

# 近代日本の教養主義

—文学部・岩波文化・知識人—

竹内 洋（京都大学）

「石原氏はすべて知的なものに対する侮蔑の時代を開いた。日本では来るべくして、一度も来なかつた時代である。戦前の軍部独裁時代は、知的ならざる勢力が、知的なものを侮蔑した時代である。しかし石原氏のひらいた時代はこれとちがつてゐる。それは知性の内乱ともいふべきもので、文学上の自殺行為だが、これは文学が蘇るために、一度は経なければならぬ内乱であつて、不幸にして日本の近代文学は、かうした内乱の経験を持たなかつた」三島由紀夫「解説」『新鋭文学叢書 8 石原慎太郎』（筑摩書房、1960年）

## 黒井千次と石原慎太郎

近代日本の教養主義を社会学的に考察する（教養ではなく教養主義の肖像）ために、二人の作家、黒井千次と石原慎太郎をとりあげたい。この二人を選んだのは、同世代の作家でありながら、旧制高校的教養主義をめぐる、継承・反復と反撥・侮蔑という対極の位置を示しているからである。

ともに、昭和7年生まれ。旧制中学校に入学し、敗戦を10代はじめで迎え、在学途中で新制高校となり、新制大学を卒業した。黒井は、昭和7年5月東京・中野生まれ、昭和20年4月都立武蔵カ丘中学入学、都立十中に転校、学制改革で都立西高卒業、昭和26年、東京大学経済学部入学。作品に『聖産業週間』『時間』『羽根と翼』などがある。石原慎太郎は昭和7年9月神戸市生まれ、昭和20年湘南中学校入学、学制改革で湘南高校卒業、27年一橋大学法学部入学。

黒井千次の作家活動は大学卒業後会社勤めをしながら、「新日本文学」などを発表誌にはじまるが、大学4年生（昭和29年）のときの論文に「敗戦を十代始めて迎えた僕らについて」（『仮構と日常』河出書房、1971年所収）が

ある。ちょうどそのころ石原慎太郎は復刊第1号『一橋文芸』に「灰色の教室」（「太陽の季節」は2作目）を発表している。

## マルクス主義的教養主義／教養主義的マルクス主義

黒井の論文にもどる。新制高校世代として旧制高校の寮生活を中心とした自己完成の追及を羨望しながらも、生活を捨象した白線地帯の自己完成という歪んだものであるとし、新しい世代は、そうした閉じられた世界での自己完成の追及ではなく、歴史的な戦いのなかで自己、実践、学問を三位一体とする自己形成への粘り強い努力をすべきであると宣言している。旧制高校的教養主義をマルクス主義の影響のもとに変革・継承していこうとする姿勢がみえる。

黒井の（大学生時代の）論文に流れる思潮は、マルクス主義的教養主義あるいは教養主義的マルクス主義といってもよい(1)ものであるが、敗戦後から1960年代までのエリート学生文化の理念型が描出されている。

黒井が大学を卒業した年、石原がまだ大学に在学し、「太陽の季節」を『文学界』に発表したころ（昭和30年）、京都大学教養部（1、2回生）学生の読書調査がおこなわれている（「学園新聞」昭和30年10月31日）。教養書を平均月に何冊読むかというアンケートがなされた。10日に1冊は教養書を読んでいることがわかる。ほとんど読んでいないと答えたものは、1.8%にすぎなかった。教養書の読書時間は、1日1.8時間。そして93%の学生が教養書を読む時間がもっとほしいと回答している。最近読んだ教養書の中で感銘がふかったものの第1位は、『ジャン・クリストフ』である。またつぎの書物の中で読んだものという問には、『若きウエルテルの悩み』71.6%、『善の研究』

25.4% (文学部47.1%)、『経済学教科書』22.5% (経済学部63%)。

1回生の政党支持は、左派社会党35.1%、右派社会党17.2%、共産党9.7%、労農党0.5%。62%が革新政党支持で、保守党(自由党・民主党)支持は5%にすぎない。マルクス主義については、積極的に支持10.2%、消極的に支持33.7%。あわせて43.9%。

(積極的・消極的に)反対10.7%を大きくうまわまっている(「学園新聞」昭和30年5月23日)。昭和30年ころのキャンパス文化が教養主義とマルクス主義に席卷されていることがあらためて確認されるだろう(2)。

### こだわりと悪意

こうした昭和30年代前後のキャンパス文化という図柄のなかで、石原慎太郎の初期作品「灰色の教室」をみると意外な感じがする。左翼藝術や藝術左翼の影響が濃厚なキャンパスでは通俗小説として貶められる運命にあったことは容易に想像できる。

「灰色の教室」は、「この年頃にあつては、欲望が彼等のモラルなのだ」というコクトーの言をエピグラフとして冒頭におき、青年の赤裸々な欲望とエネルギーの奔流を生々しく描出している。さきほど述べたように復刊第1号『一橋文芸』に発表されたが、掲載された他の小説ともども仲間や先輩(瀬沼茂樹)には、「社会科学性に乏しい」通俗小説として酷評される(「一橋新聞」昭和30年1月20日、2月10日)。「こんなブルジョアの墮落しきった学生たちを主人公にしたような作品に誌面を与えるために伝統ある『一橋文芸』を復刊したわけではない」といわれた(『弟』、1996年)。

もちろん石原も時代の子である。「灰色の教室」の発表直後、一橋新聞に「『一橋文芸』の編集を終えて」や「学生文学とは何か」を寄稿し、プロレタリア文学の残照を感じさせる「社会科学性」という用語あるいは「ユマニスム」(古典的教養)という言葉さえ使っている。「社会科学的ユマニスム」を提起している。当時の石原は戦後の大学キャンパスに蘇った

昭和初期の学歴エリート文化をなぞった発言をしているのである。

いやそれよりも高校時代に湘南中学校の先輩で当時の一高教授江口朴郎のもとに唯物史観を聞きにいき、民学同(民主主義学生同盟、日本共産党日本のこえ派、昭和23年結成)に入り、校内に社会研究会をつくったりしている。

そのかぎり、「灰色の教室」は、左傾活動から生命主義への転向文学ともいえる。そうした転換の先駆には、田村泰次郎の肉体文学がある(3)が、石原は、しだいに旧制高校的教養主義や左翼知識人への違和感を鮮明にした作品を発表するようになる。石原慎太郎の初期作品の特徴は欲望とエネルギーの赤裸々な描出やヨットなどスポーツが作品の要を占めていることにとどまらない。「教養」や「知識人」に対するこだわりと悪意を作品化したということに独自の位置をみることができる。

### ハビトゥスへの違和感

たとえば、『亀裂』(昭和31～32年)である。大学院生である明は、小説を書きながら、クラブにも出入りしボクサーくずれとつきあっている。高村教授、T教授、植原教授など当時論壇で活躍する一橋大学の教授がでてくる。明は植原教授(上原専禄)を除いてこれらの教授をディレクタントの茶番と憎悪する。「教養というものは現代じゃ失格しているのだ」「俺はインテリは嫌いだ。奴らは豚だ」と叫ぶ。

『処刑の部屋』(昭和31年)でも主人公の大学生克己は思想研究会の吉村を憎悪する。吉村に代表される教養知識人やその予備軍について、つぎのように罵倒する。「厭な奴、厭な奴。小賢(こざか)しい奴。こ奴には張って行く肉体(からだ)がない。頭でつかちの、裸にすれば痩せっぽちのインテリ野郎。こ奴らは何も持ってやしない。何もで出来やしない。しゃべるだけ、しゃべくってしゃべくって何も出て来ない言葉の紙屑だけだ。俺を見て、大学まで行くと奴らは言うが、俺も大学まで行ってこ奴らみたいになりたかない」。克己は、吉村が恋慕している思想研究会の頭子に睡眠薬を飲ませて強姦さえ

する。

悪意や憎悪の源は知識人や教養のあれこれの言説ではない。「頭でっかちの、裸にすれば痩せっぽちのインテリ野郎」という罵詈雑言が、そうであるように、言説の背後にある教養主義知識人のハビトゥスへの違和感と嫌悪である。

黒井は、卒業後、1950年代に大学キャンパスで過ごした者を主人公にしながら高度成長下の企業や家庭を逆照する作品を描きつづけている。それだけに黒井の作品は、50年代のキャンパス文化（マルクス主義的教養主義、教養主義的マルクス主義）が相対化されることなく自明化されている（『五月巡礼』『羽根と翼』など）。石原慎太郎の「徹底した侮蔑」「生理的嫌悪」にこそ、近代日本の教養主義とはなんであったかを考えるための大いなる手がかりがあるとおもわれる。話をここからはじめたい。

#### 注

（1）黒井の想定する旧制高校的教養主義は、戦争末期のマルクス主義の影響が減じた旧制高校をレファラントとしている。またマルクス主義の影響からもっとも遠い竹山道雄の論説を旧制高校的教養主義の理念型として引用していることにみることができるように、時代的にも限定された旧制高校的教養主義の描出であることはいなめない。大正末期から昭和初期をみれば、旧制高校的教養主義は、マルクス主義的教養主義であり、教養主義的マルクス主義である。そのかぎり、旧制高校的教養主義の戦後的変革・継承というよりも大正末期から昭和初期（10年代はじめ）の旧制高校的教養主義の戦後的（新制高校的）反復といってもよいのである。

（2）「京都大学新聞」には昭和30年から昭和42年まで毎年、学生の政党支持調査が掲載されている。いずれの年度においても上級学年になるにつれ、革新政党支持が多く、保守政党支持が少なくなっている。たとえば、1960年6月でみると、社会党支持は31%（1回生）、35%（2回生）、39%（学部生＝3，4回生）、共産党支持3%（1回生）、4%（2回生）、8%（学部生＝3，4回生）と学年を上げるにつれ、増大している。自民党支持5%（1回

生）、5%（2回生）、1%（学部生＝3，4回生）。キャンパスにおける政治的社会化の作用が明確である。

（3）エネルギー主義、生命充足主義は、高山樗牛の美的生活論にまで遡ることができるが、左傾活動→生命主義の「転向文学」の先駆には、昭和初期に、左翼学生運動のシンパとして活動しながら、挫折し、庶民の生命力に開眼し（『大学生』）、戦後、『肉体の門』などの作品を生んだ田村泰次郎が挙げられる。『大学生』の主人公は、左傾活動後の傷心の身を房総に旅することで癒す。漁師（庶民）たちの生命力に目を開かれた田村泰次郎と、弟たち（ブルジョアの子女）のヴィタリズムの出会いをもった石原慎太郎はパラレルである。いずれも舞台は「海」！きだみのるは、「太陽の季節」が社会現象となったときにこういつている。「太陽の季節」にでてくるようなことは、部落では若者がしょっちゅうやっていることだ、ヨットなどの道具立てで都会の青年がやっているのとおもしろがられたのだ、部落的（日本的）ヴィタリズムだ、と。